公開用

滋賀県文化審議会次世代育成部会第３回会議　議事録概要

１　日　時　　平成 24 年 3 月 22 日（木）10:00～12:00
２　場　所　　滋賀県庁本館４Ａ会議室
３　出席者　　委員：木下委員、杉江委員、瀬古委員、辻委員、宮本委員
　　事務局：多胡次長、西川課長、片山参事ほか
４　議　題　　（１）議題１　平成２３年度の次世代育成施策の実施状況について
　　（２）議題２　子どもが本物の文化に触れる取組の推進施策について
　　（３）その他
５　議事録　　以下のとおり

■　**次長挨拶**

■　**議　題**

（１）議題１　平成２３年度の次世代育成施策の実施状況について

〇委員

・滋賀県文化振興事業団の次世代文化芸術推進事業（和楽器（箏）プログラム）の視察に行った。アウトリーチ活動はどうしても学校の先生の関わりが少なくなってしまうが、視察先では学校の先生とアーティストの役割分担がうまくいっていたように思う。ただ内容的には音楽を創る部分を重点的に取り組んだ方がよかったのではないか。また楽器については十三弦の箏を揃えたほうがよい。

〇部会長

・子どもたちが授業を受けたあと、リサイタルやコンサートなどホールでの鑑賞機会につなげるようなプログラムが望ましい。

〇委員

・びわ湖ホールのふれあい音楽教室の視察に行った。短時間で子どもたちの様子が変わっていくのが分かり、素晴らしい内容だったと思う。鑑賞だけでなく、創造型のプログラムを目指すとともに、評価を次年度に反映させていくことを積み重ねるとよりよい事業になると思う。

〇委員

・滋賀県文化振興事業団の次世代文化芸術推進事業（打楽器プログラム）の視察に行った。このような取組は若手アーティストの育成の場としてふさわしいが、アーティストの成長をサポートするためのコーディネーターが必要である。また、アーティストの選定にあたっては、オーディションシステムを採用するべき。

・アーティストとして学校でアウトリーチ活動を行う場合、学校側の受入姿勢がオ

ープンであると非常にやりやすい。

○委員

・紙の記録だけでなく、映像の記録を残すべきである。

・コーディネーターの質の確保が大切である。地域のコミュニケーションを促進するために絶対に必要な人材として育成を図っていくことが必要である。

○委員

・アーティストのオーディションシステムを実施するのであれば、技術的な面だけでなく、人をひきつける資質も問うべきである。

○委員

・びわ湖ホールのふれあい音楽教室の視察に行った。複数のクラス、学校を視察したが、基本的なプログラムは同じでも、アーティストの経験やパーソナリティ、学校の先生のスタンスによって、内容が大きく異なる。

・コーディネーターには学校現場も分かる力をつけていただきたい。

○委員

・学習指導要領の改訂で、美術については色、形、イメージ、画面構成等の重要性が言われており、近代美術館がつくっている「鑑賞授業プログラム・パック」は活用できる。

・近代美術館で作品の見方や画面構成などの基本的なことを学べる学校教員向けの研修を実施してほしい。

（２）議題２　子どもが本物の文化に触れる取組の推進施策について

○部会長

・市町ごとに意識の高いところと低いところがあり、その格差をどうするかが課題である。

○委員

・情報発信については、一般向けに３分くらいで事業を紹介できるようなものと研修棟で使用するための１０～２０分くらいのものと２通りの映像をつくるとよい。

・人材育成については、まずコーディネーターの発掘が最も大事である。身分保障や権限保障も同時に考えて育成・研修する必要がある。

・プログラムの充実については、県内外、海外等で実施されているすばらしいプログラムの情報を集約し、研修等で報告や交流をすることが、新しいプログラムの開発につながるのではないか。

・不登校児童を含めて芸術を通じた人格形成のあり方については、今後も研究課題として取り組んでほしい。

○委員

・今、各小学校区単位で地域活動を行っている。そういった取組についてもぜひ支

援をお願いしたい。

・近代美術館については多くの子どもたちに来てもらえるよう魅力ある施設になってほしい。学芸員の解説やキッズコーナー、ミュージアムショップのあり方など検討する必要がある。

〇委員

・美術館やホールについてはフリースペースが重要で、子どもや地域の人が気軽に遊びに行けるような仕掛けづくりが必要である。

〇委員

・コーディネーターはアーティストとの信頼関係を構築することが重要である。

・ボランティアからコーディネーターになるチャンスもあっていい。

・学校の先生が芸術を受け入れてくれるかどうかで、アーティストが学校に行ったときの空気感が違う。学校の先生に芸術を知っていただくことは必要である。

〇委員

・大阪ボランティア協会でつくられているボランティアコーディネーター資格制度と連携するのも一つの方法である。

・学校のコーディネーター、美術館のコーディネーター、それらをつなげていくコーディネーターなど、各セクションにコーディネーターがいる重層的な仕組みが必要である。

・コーディネーターになりうる人材を発掘することがとても大事で、その人材をきちんと育成していくシステムを構築していければ素晴らしい組織になる。

〇委員

・学校教員は異動が必ずあるので、資質をもった素晴らしい人材がいても、異動によってアーティストや文化施設と築いたネットワークが消滅してしまうことがある。

〇委員

・各学校ではなく、地域単位でコーディネーターの資質を兼ね備えた人材を育てていくという方向性がいいのではないか。形式だけのコーディネーターを各学校におくよりも、地域の中から人材発掘したほうが成果があると思う。

〇委員

・地域の文化ホールにコーディネーターがいれば、各学校でのアウトリーチ活動はできる。

〇委員

・核となる人が異動してしまうとノウハウやネットワークがなくなってしまう。それを補完するために、サブコーディネーターをおくとか、周りのネットワークを強固にしておくなどの工夫も必要である。

・次世代育成に関する取組については、分かりやすいインパクトのあるネーミング

を考えてはどうか。

（以上）